

2008. 09. 23（火）

ベック兄メッセージ（メモ）

引用聖句

出エジプト記 3章1節から17節

モーセは、ミデヤンの祭司で彼のしゅうと、イテロの羊を飼っていた。彼はその群れを荒野の西側に追って行き、神の山ホレブにやって来た。すると主の使いが彼に、現われた。柴の中の火の炎の中であった。よく見ると、火で燃えていたのに柴は焼け尽きなかった。モーセは言った。「なぜ柴が燃えていかないのか、あちらへ行ってこの大なる光景を見ることにしよう。」主は彼が横切って見に来るのをご覧になった。神は柴の中から彼を呼び、「モーセ、モーセ。」と仰せられた。彼は「はい。ここにおります。」と答えた。神は仰せられた。「ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である。」また仰せられた。「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは神を仰ぎ見ることを恐れて、顔を隠した。主は仰せられた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを確かに見、追い使う者の前の彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを知っている。わたしが下って来たのは、彼らをエジプトの手から救い出し、その地から、広い良い地、乳と蜜の流れる地、カナン人、ヘテ人、エモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人のいる所に、彼らを上らせるためだ。見よ。今こそ、イスラエル人の叫びはわたしに届いた。わたしはまた、エジプトが彼らをしいたげているそのしいたげを見た。今、行け。わたしはあなたをパロのもとに遣わそう。わたしの民イスラエル人をエジプトから連れ出せ。」モーセは神に申し上げた。「私はいったい何者なのでしょう。パロのもとに行つてイスラエル人をエジプトから連れ出さなければならぬとは。」神は仰せられた。「わたしはあなたとともにいる。これがあなたのためのしるしである。わたしがあなたを遣わすのだ。あなたが民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で、神に仕えなければならない。」モーセは神に申し上げた。「今、私はイスラエル人のところに行きます。私が彼らに『あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました。』と言えば、彼らは、『その名は何ですか。』と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか。」神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある。』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。『わたしはあるという方が、私をあなたがたのところへ遣わされた。』と。」神はさらにモーセに仰せられた。「イスラエル人に言え。あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主が、私をあなたがたのところへ遣わされた、と言え。これが永遠にわたしの名、これが代々にわたつてわたしの呼び名である。行って、イスラエルの長老たちを集めて、彼らに言え。あなたがたの父祖の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神、主が、私に現われて仰せら

れた。『わたしはあなたがたのこと、またエジプトでああなたがたがどういうしうちを受けているかを確かに心に留めた。それで、わたしはあなたがたをエジプトでの悩みから救い出し、カナン人、ヘテ人、エモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の地、乳と蜜の流れる地へ上らせると言ったのである。』

先週に引き続き、「モーセの生涯」について一緒に考えてみたいと思います。

先週私たちは、いかにしてモーセが召し出されたのか、聖霊をうちに宿して主なる神に用いられる器になったかについて考えました。それは三つのことでした。

第一番目、召しの条件。

第二番目、召しの方法。

第三番目、召しの理由。

・いつ、主はモーセを召し出されたのでしょうか。

モーセが、全く失望し、全く空の器となり、完全に明け渡した時に、主はモーセを召されました。

・どのようにして、主はモーセにお会いになったのでしょうか。

生ける神ご自身が火を点じて、盛んに燃え上がり、消えることのない聖なる預言的な炎によって、お会いになりました。

・なぜ主は、モーセにご自身を現わされたのでしょうか。

主ご自身が、いかなるお方であるか、モーセにお示しになりたかったのです。しかし、それだけではありません。主はモーセに、「ご自身のいのち」を分け与えられたかったからです。そして、モーセを器として、また道具として、イスラエルの民の救いのためにお用いになりたかったのです。そのために主はモーセに現われ給うたのです。

主の霊が燃える炎となって、当たり前の何のとりえもない荒野の柴に燃え移り、盛んに燃えました。いったいこの柴は、何を示しているのでしょうか。それは私たちが、神の山ホレブの荒野の柴のように神の火に燃やされ、その火が消えず、聖霊がうちに宿り、いつも御霊の火によって燃やされ、御霊を包む着物のようにならなければ、まことの神のしもべとなることできないからです。

ところで、あの燃えて消えなかった柴とは誰だったのでしょうか。言うまでもなくイエス様です。モーセは、主イエス様を現わすその柴を見て、イエス様との交わりを持ったので召し出されたのです。

主なる神がご自身を現わされるときには、いつも「イエス様」を通してなさいます。クリスマスは、神が肉体を持って現われ給うた日を記念する日ですが、主なる神はこの時も、もちろんイエス様を通して、ご自身を現わされました。また、主なる神は人間をお救いに

なるために、御子であられる「主イエス様」を犠牲になされたのです。

パウロはコリントにいる兄弟姉妹に書きました。コリント第二の手紙5章19節ですが、一節だけですから読みます。

コリント人への手紙・第二 5章19節

すなわち、神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことばを私たちにゆだねられたのです。

と。主なる神は、主イエス様によって世をご自分に和解させられました。同じように、主なる神はモーセに現われ給うた時、イエス様を通して現われ給うたのです。

そして主なる神は、モーセにご自身を現わされただけではなく、ご自身のいのちをモーセの中に注ぎたいと思われて、現われ給うたのです。その偉大なる主は、モーセのような者の中に住みたいと心から望んでおられました。モーセが主なる神によって召された後、モーセの心には「神の火」が灯されていました。聖霊がモーセの心の中で燃えていました。その時、主なる神は、モーセを用いてイスラエルの民を救い出されたのです。

主なる神の御目的は、イスラエルの民をエジプトから導き出すことだけではありませんでした。主は、イスラエルの民を通してご自分を外に現わしたいと願われたのです。後に、民たちが作ったその「幕屋」に、主なる神の栄光が満ち満ちたと書いてありますように、「幕屋」は主なる「神の栄光」に包まれました。主なる神は、イスラエルの民を通してご自身を現わされました。

同じように、聖霊の時代である今の時代においても、主は人々を救うだけでなく、救われた人々の「家庭」を、また主のからだなる「教会」を通して、ご自身の栄光を現わそうとしておられるのです。

かつて、モーセの時代のイエスラエルの民の敵たちが、幕屋を見、神の栄光を見て恐れたように、今の時代にも私たち神の民を、世人が見て恐れおののかなければならないはずです。

更に、神はどのようにしてイスラエルの民を救い出されたのでしょうか。

まず、主が一人の人のところへやって来られて、その人のうちに宿り、その人を通して民を救い出されました。取るに足りない小さな人間の中に宿り給うた偉大なる神だけが、人を救い得るのです。

イエス様は、あまり見栄えのしない柴のようなお方でした。しかし、そのうちには偉大なる神が宿っておられたのです。イエス様は、見たところ普通の人間と少しも変わっておられませんでした。けれどもその中に、主なる「神の炎」が燃えていました。ですから、人々を救いへと導くことがおできになったのです。

モーセは、召される前は「自我の強い柴」でした。「自らを良しとする柴」でした。その時も、モーセは肉的な火を持っていました。彼は燃えていました。しかし、その火はエジプト人を殺してしまいました。「主によって灯された火」ではない異火は、実に悲惨な結果をもたらしたのです。しかし、後に上から主によって火を灯されたモーセは、イスラエルの民をエジプトの奴隷下から救い出すことができただけでなく、つぶやき逆らうイスラエルの民と四十年の間、荒野を旅する忍耐が養われていました。

モーセのうちに住み給う主は、イスラエルの民を救われました。イエス様のうちに住み給う主なる神は、全人類を贖い出されたのです。ペテロのうちに住み給う主は、一日に三千人の人々を救い出されたのです。「空の器」があり、そこに神の霊が満たされる時、そこではいつも人々が救い出されていきます。

パウロは、そのことをちょっと違う言葉で次のように書き記したのです。

コリント人への手紙・第二 4章7節

私たちは、この宝を、土の器の中に入れていたのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。

「私たちは、この宝を、土の器の中に持っている」と書いてあります。私たちは「主の栄光」、「燃えて尽きない炎」、「聖霊」を土の器の中に持っています。その測り知れない力は神のものであって、私たちから出たものでないことが現われるためなのです。

主が人間をお用いになられる条件は、まず私たちが土の器、結局役に立たない「空っぽの器」となることであり、次に、「自らの火」を持たないことです。

モーセは、「私は語る事ができない」と、自分の無力さを主に訴えています。このように、主なる神の条件を満たした時に、初めて測り知れない神の力が臨んできます。その時初めて、私たちはパウロと同じように、「私たちはこの宝を持っている」と言うことができるようになるのです。私たちは、「持っている」と言えるのでしょうか。

モーセは数年の間、主を仰ぎ見、主の御心を行なおうと努力し、主の民のことを気遣い救おうとしましたが、みな自分の力で行ないました。けれど、今モーセは主を拝するうちに主を宿し、今度はモーセではなく、「モーセのうちに住み給う主」が、働き始められたのです。モーセは「自分の力」で、「自分の努力」で、主に仕えることをしなくなりました。その結果、モーセは、主がすべてのことを御手のうちに治めて執り行なって下さるということを、身をもって体験したのです。

今や主がすべてを行なって下さいます。モーセに残された使命と言え、ただ、その主に従順に従って行くということだけです。

次に、燃えさかる柴によって「モーセに現われ給い、モーセを召された主」について、考えたいと思います。出エジプト記 3 章 6 節です。

出エジプト記 3 章 6 節

また仰せられた。「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは神を仰ぎ見ることを恐れて、顔を隠した。

出エジプト記 3 章 15 節前半

神はさらにモーセに仰せられた。「イスラエル人に言え。あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主が、私をあなたがたのところに遣わされた、と言え。」

出エジプト記 4 章 5 節

「これは、彼らの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主があなたに現われたことを、彼らが信じるためである。」

と記されています。

「モーセを召された主」とは、いったいどなたでしょうか。今の箇所を見ると、三つのことが言えます。

第一番目、アブラハムの神である「全能の主」。すなわちアブラハムの神は全能の神です。

第二番目、イサクの神である「よみがえりの主」。すなわちイサクの神はよみがえりの神です。

第三番目、ヤコブの神である「きよめの主」。すなわちヤコブの神はきよめの神です。

主は「全能のお方」であり、「よみがえりの主」であり、「きよめの神」です。

* 第一番目、アブラハムの神は「全能の神」です。

アブラハムの生涯を学んでいきますと、「主が全能なるお方」であることがよくわかります。主なる神が全能であられることが現われると、それはもちろん「栄光」です。主なる神は、アブラハムの生涯を通して、ご自身が「全能なるお方」であることをはっきりと示されました。ですからアブラハムは、神の栄光を拝しました。使徒行伝 7 章 2 節を見ると、書かれています。

使徒の働き 7 章 2 節

そこでステパノは言った。「兄弟たち、父たちよ。聞いてください。私たちの父祖アブラハムが、カランに住む以前まだメソポタミヤにいたとき、栄光の神が彼に現われて、…」

「栄光の神がアブラハムに現われた」と。

全能なる神が御手を差し伸べ、アブラハムの上に置き給い、行くべき道を、主の御心を示

されました。この「アブラハムの神」が、モーセに現われ給うたのです。この神はモーセを通して働くことを願われたのです。「アブラハムの神」と、自らの名前の肩書きに「アブラハム」をつけています。

この結びつきと交わりの秘密は何でしょうか。聖書はたびたび、「アブラハムは神を信じた」と記しています。例えば、

ローマ人への手紙 4章3節

聖書は何と言っていますか。「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義と見なされた。」とあります。

ガラテヤ人への手紙 3章6節

アブラハムは神を信じ、それが彼の義とみなされました。それと同じことです。

と書かれています。「救いに至る信仰」は、私たちと主なる神とを結ぶ帯です。私たちは、「信仰」によって、「全能なる神」と結びつくことができるのです。

信仰によって救われた二人のアブラハムの子どもの体験について、見てみましょう。

一箇所は、ルカ伝13章です。

ルカの福音書 13章10節から17節

イエスは安息日に、ある会堂で教えておられた。すると、そこに十八年も病の霊につかれ、腰が曲がって、全然伸ばすことのできない女がいた。イエスは、その女を見て、呼び寄せ、「あなたの病気はいやされました。」と言って、手を置かれると、女はたちどころに腰が伸びて、神をあがめた。すると、それを見た会堂管理者は、イエスが安息日にいやされたのを憤って、群衆に言った。「働いてよい日は六日です。その間に来て直してもらうがよい。安息日には、いけないのです。」しかし、主は彼に答えて言われた。「偽善者たち。あなたがたは、安息日に、牛やろばを小屋からほどもき、水を飲ませに連れて行くではありませんか。この女はアブラハムの娘なのです。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。安息日だからといってこの束縛を解いてやってはいけないのですか。」こう話されると、反対していた者たちはみな、恥じ入り、群衆はみな、イエスのなさったすべての輝かしいみわざを喜んだ。

「この女はアブラハムの娘なのです」。主によって、主の全能なる力を経験した女性は、「アブラハムの娘」と呼ばれています。

もう一箇所、ルカ伝19章1節から。よく知られている箇所です。

ルカの福音書 19章1節から10節

それからイエスは、エリコにはいて、町をお通りになった。ここには、ザアカイという人がいたが、彼は取税人のかしらで、金持ちであった。彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見ることができなかった。そ

れで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。ちょうどイエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行って客とられた。」と言ってつぶやいた。ところがザアカイは立って、主に言った。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がかまし取った物は、四倍にして返します。」イエスは、彼に言われた。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」

もし、私たちが「全能なる神」と結びついているなら、「神の全能なること」は、私たちの生活を通して外に現われていくはずです。アブラハムの生涯を通して、それは明らかになりました。ヘブル書の著者は、次のように書いたのです。

ヘブル人への手紙 11章8節

信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。

ヘブル人への手紙 11章17節

信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。

と書かれています。「信じる者の生活を通して」、主の栄光が現われていくはずです。

「われはアブラハムの神、全能なる神である」。神はアブラハムと堅い交わりを持っておられました。ですから、神はアブラハムに、「わたしのしようとすることをアブラハムに隠してよいであろうか」と言われたのです。

また、神はアブラハムを、「友」と呼んでおられたのです。

イザヤ書 41章8節

しかし、わたしのしもべ、イスラエルよ。わたしが選んだヤコブ、わたしの友、アブラハムのすえよ。

「わたしの友、アブラハム」とあります。

ヤコブの手紙 2章23節

そして、「アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた。」という聖書のことばが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。

と記されています。あるいは、

歴代誌・第二 20章7節

「私たちの神よ。あなたはこの地の住民をあなたの民イスラエルの前から追い払い、これをとこしえにあなたの友アブラハムのすえに賜わったのではありませんか。」

と書かれています。主なる神は、友なるアブラハムにご自身のご計画を全部告げられました。主イエス様がどのようになさるかも、アブラハムは主に教えられ知っていたようです。ですから、イエス様はヨハネ伝8章56節で、次のように言われました。

ヨハネの福音書 8章56節

「あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見ることを思って大いに喜びました。彼はそれを見て、喜んだのです。」

とあります。「アブラハムは、もうすでにイエス様の子どもだった」と記されています。

このアブラハムの神、その同じ神がモーセに現われ給いました。モーセは、アブラハムを「友」と呼ばれた神が自分にも現われ給い、「わが友モーセ、わがしもべモーセ」と言われるのを知ったのでした。モーセは、この主なる神との親しい交わりが自分にとってはどうしても必要なものであることを、深く知ったのです。

全能なる神、アブラハムの神が三つの面を持ってモーセに現われ給うたことを、モーセは知りました。

1. アブラハムの神は、全能の力をもって自分を救い出されたということ。
2. アブラハムの神は、その御力をもって自分を救い出されただけではなく、選び出されたということ。
3. アブラハムの神は、全き準備を自分のために成してくださるということ。

この三つをモーセは知ったのです。

モーセは荒野の四十年の訓練において、自らの真相を教えられました。失敗も自らよく知っており、本当に虚しくなっていましたので、神の山ホレブで「神の義」を見た時、それは失望のモーセに希望の火を灯したのです。このとき以来、モーセはアブラハムと同じように、不可能なことはない全能なる神との親しい交わりが欲しいと、思い続けるようになったのです。

それとともにモーセはその時、今自分に現われ給うた神は、「アブラハムの神」であられるばかりでなく、「自分の神」でもあられることを深く知ったのです。私たちも同じように、主はアブラハム、モーセの神であられるばかりではなく、「私たちの神」でもあられることを深く知りたいものです。

モーセを召された主とはどなたでしょうか。今話しましたように、「アブラハムの神である全能の主」すなわち、「アブラハムの神は全能なる神」です。

*第二番目、イサクの神である「よみがえりの主」つまりイサクの神は、「よみがえりの神」です。

イサクの誕生は、よみがえりの神のなし給うた奇跡でした。この「よみがえりの神」は、すでに年老いて子を産めなくなったサラから子どもイサクの誕生となりました。このようにして生まれたイサクが成長した時、主は、父アブラハムに、「その子イサクをモリヤの山に連れて行き、いけにえとしてささげよ」と命じられました。アブラハムは、「神は死人の中から人をよみがえらせる力がある」と信じていましたので、主に従順に従い、イサクをささげるつもりでした。つまりアブラハムは、「神がイサクをよみがえらせる力もある」ことを信じて、主に信頼したのです。主が天から約束して言われたことばを、アブラハムは信じたのです。創世記 22 章を見ると、次のように書かれています。

創世記 22 章 17 節

「わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。そしてあなたの子孫は、その敵の門を勝ち取るであろう。」

とあります。アブラハムは主のみことばを信じていました。そして決して失望することを知りませんでした。似ている約束は、イザヤ書 60 章 22 節に書かれています。

イザヤ書 60 章 22 節

最も小さい者も氏族となり、最も弱い者も強国となる。時が来れば、わたし、主が、すみやかにそれをする。

と書かれています。弱き者を強くし、小さき者を大いなる者とするのは、「よみがえりの神、イサクの神」です。イサクの神が私たちに語りかけてくださったなら、この素晴らしい神に全てを任せましょう。私たちを救い選び出された神は、よみがえりの力を持つお方です。死んで枯れてしまった骨のような者でも、主は生き返らせることがおできになります。どんなにみじめな失敗をしてしまった者も、再び立たせることがおできになります。

この神に信頼するならば、決して失望に終わることがありません。「不可能なことを可能にするよみがえりの神」であられるのです。

「よみがえりの神」は、どこに現われ給うのでしょうか。もしある人がゼロとなったら、その時、その人に「よみがえりの神」は現われ給います。私たちが全く失望し、全く「空の器」となり、完全に自分の全てを主に明け渡した時、「よみがえりの主」は私たちに現われ給うのです。

よみがえりの神は、アブラハムにも現われ給うたのです。ローマ書 4 章を見ると、まとめて次のように書かれています。アブラハムの経験についてです。

ローマ人への手紙 4 章 17 節から 21 節

このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るもののようにお呼びになる方の御前で、そうなのです。彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。それは、「あなたの子孫はこのようになる。」と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした。アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだが生んだのも同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱りませんでした。彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。

主なる神はご自分を現わされたいのです。ですから、人々を絶望の中に追いやられます。パウロの経験について読んでみるとわかります。よく引用される箇所です。素晴らしい証しです。自分の辛い経験についてです。

コリント人への手紙・第二 1章8節から10節

兄弟たちよ。私たちがアジヤで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにはのちさえも危うくなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださいという望みを、私たちはこの神に置いているのです。

パウロは事を大げさに言わない人でした。主なる神がご自分を現わされるには、これらの悩みと苦しみが必要だったのです。

エゼキエル書 37章からもう一箇所読みましょう。

エゼキエル書 37章11節から14節

主は私に仰せられた。「人の子よ。これらの骨はイスラエルの全家である。ああ、彼らは、『私たちの骨は干からび、望みは消えうせ、私たちは断ち切られる。』』と言っている。それゆえ、預言して彼らに言え。神である主はこう仰せられる。わたしの民よ。見よ。わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがたをその墓から引き上げて、イスラエルの地に連れて行く。わたしの民よ。わたしがあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓から引き上げるとき、あなたがたは、わたしが主であることを知ろう。わたしがまた、わたしの霊をあなたがたのうちに入れると、あなたがたは生き返る。わたしは、あなたがたをあなたがたの地に住みつかせる。このとき、あなたがたは、主であるわたしがこれを語り、これを成し遂げたことを知ろう。—主の御告げ。—」

と書かれています。エゼキエルという預言者は、主なる神は冷たい死んだ石からでさえ子を起こすことがおできになり、墓の中から民を「よみがえらせることのおできになる方」

であることを知っていました。「よみがえりの神」は、死の匂いのする墓の中から星のように多くの子孫を生み出すであろうと約束されたのです。

燃える柴を通して、「よみがえりの神」、「イサクの神」が、モーセに現われ給いました。そしてモーセは、この「よみがえりの神」は、その御力をもって自分を用いて、エジプトからイスラエルの民を導き出そうとしておられるということを知りました。

初めにモーセがエジプトの王パロの宮殿で生活した四十年の間、モーセは、自分はいろいろなことを知っているし、自分で何でもできると思ってしまったのです。次に、モーセは四十年、ミデヤンの荒野で主の教育を受けました。しかしその時モーセは、自分は何もできないことを悟ったのです。それに続く更に四十年、モーセは神とともに働きましたが、そのときのモーセは、「自分は主によってすべてのことができる」と確信して立っていたのです。それは、モーセが「全能なる神」、「全能なるアブラハムの神」、「よみがえりの神」であられるイサクの神」を目の当たりに拝して、その力にあずかったからです。

モーセを召された主はどなたなのでしょう。アブラハムの神である「全能の主」、すなわち「全能の神」です。またイサクの神である「よみがえりの主」、すなわち「よみがえりの神」です。

*三番目、ヤコブの神である「きよめの主」すなわち「きよめの神」です。

創世記 3 2 章。ヤコブの経験についての箇所です。

創世記 3 2 章 2 2 節から 3 1 節

しかし、彼はその夜のうちに起きて、ふたりの妻と、ふたりの女奴隷と、十一人の子どもたちを連れて、ヤボクの渡しを渡った。彼らを連れて流れを渡らせ、自分の持ち物も渡らせた。ヤコブはひとりだけ、あとに残った。すると、ある人が夜明けまで彼と格闘した。ところが、その人は、ヤコブに勝てないのを見てとって、ヤコブのものつがいを打ったので、その人と格闘しているうちに、ヤコブのものつがいが外れた。するとその人は言った。「わたしを去らせよ。夜が明けるから。」しかし、ヤコブは答えた。「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださなければ。」その人は言った。「あなたの名は何というのか。」彼は答えた。「ヤコブです。」その人は言った。「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。あなたは神と戦い、人と戦って、勝ったからだ。」ヤコブが、「どうかあなたの名を教えてください。」と尋ねると、その人は、「いったい、なぜ、あなたはわたしの名を尋ねるのか。」と言って、その場で彼を祝福した。そこでヤコブは、その所の名をペヌエルと呼んだ。「私は顔と顔を合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた。」という意味である。彼がペヌエルを通り過ぎたころ、太陽は彼の上に上ったが、彼はそのもものためにびっこをひいていた。

ヤコブは主に祝福された者、また解放された者として大いに喜んだに違いありません。イエス様が復活され、弟子たちと出会われた時も、「弟子たちは主を見て喜んだ」と書かれています。

ヤコブの神は、「きよめの神」です。「自我からの解放の神」です。

ヤコブという名前は、「あざむく者」という意味を持っています。ヤコブはいつも自分の利益を考えていた者でした。主なる神は二十年の間、ヤコブのそのような「自我」につける性質を砕こうとして語り続けられましたが、彼はなかなか砕かれることを経験しなかったのです。

ヤコブも神に奉仕しようと思ったのです。しかしヤコブの奉仕は、全部自分の力で自分のためにするものでした。ヤコブのような方法では、主のご目的は達成されません。「主はご自分の方法をもって」ご自分の目的を成し遂げられます。ヤコブにはそれがわかるまで、長い時間がかかったのです。

ヤコブは、策略によって長子の特権を兄エサウから奪い取り、また、父を平気で騙して長子の祝福を受け、自ら妻を選び取りました。妻は自分で選ぶものではありません。主から与えられるものです。また、騙してラバンの富を奪い取りました。その結果はどうだったのでしょうか。ヤコブはハランへ逃げのびなければならなくなりました。そしてヤコブはベテルで神にお会いしましたが、汚れた自らが主にお会いした時、「これは何という恐るべき所であろう！」と叫んだのです。ベテルは、「神の家」という意味です。

テモテへの手紙・第一 3章15節後半

神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。

と記されています。ヤコブは逃げていたとき、表面的には富んでいましたが、心のうちには満足がなかったのです。ヤコブは兄のエサウを憎んでいました。彼は自分の家にいるのに平和がありませんでした。次に、彼はラバンと争ってしまいました。その結果、良心の呵責がヤコブを責めつけます。自分で自分を救おうとしましたが、それは負い目を増すばかりでした。

このヤコブに、神は「アブラハムの神」として、また「イサクの神」として、語りかけられました。神はヤコブを全く解放し、「ヤコブの神」となられたかったのです。

次に、ヤボクの渡しで、ヤコブは神と相撲を取りました。その時、神はヤコブに「お前の名前は何という名か？」と尋ねられ、ヤコブは「ヤコブ、あざむく者です」と正直に答えました。ヤコブは、主なる神に追いつめられ、自分の罪を認め、言い表わしたのです。その瞬間に神は、「わたしはヤコブの神である」と言われたのです。

神の山ホレブで燃える柴の中から現われ給うた神は、この「ヤコブの神」でもありました。モーセはその時、「ヤコブの神」は、モーセ自身を「自我」の生活から解放なさらしたいのだということを知りました。ヤコブを見捨てず、きよめ、ヤコブの神となられた神は、

更にモーセをきよめ、「モーセの神」となろうとされたのです。

「全能の神」は、アブラハムと一つになり、「アブラハムの神」となられました。なぜでしょう。アブラハムが自分の弱さを認め、どうしても全能なる神の力を必要とし、これを求めたからです。

同じことがモーセに起こったのです。モーセは自分の無力さと無能力を深く悟り、主に「私は話すことができません」と言いわけをしました。その時に、その場で主は、「われは全能にして、不可能なことはないアブラハムの神である」とその全能なる御姿をモーセに現わし給うたのです。モーセが「私は何もできません」と主に告白した時、主は、「それは良い。それが私の目指すところだった。何もできない器を通して、わたしは自分の思うことをすることができる」と言われたのです。

「よみがえりの神」は、イサクと一つになり、イサクの神と呼ばれました。なぜでしょう。

イサクは絶望の淵を何度も通りました。この望みのない状態のイサクと、主は結びついてくださいました。人が全く絶望し切ったとき、主はご自身を現わすことがおできになります。モーセが、エジプトの王子ではなく、いっかいの羊飼いに成り下がったとき、主はモーセに現われ、イスラエルの民を救い出し、目覚めさせる「よみがえりの神」としての本質を現わし給うたのです。

そして、「きよめの神」はヤコブと結びつき、「ヤコブの神」とと呼ばれました。どうしてでしょう。きよめの神は、性格の弱いヤコブのうちに、ご自身をお現わしになりたかったのです。ヤコブは、自らに絶望し、自分の罪を神に告白して、神のみこころにかなった器となりました。

このきよめの神は、モーセにも現われ給いました。この「きよめの神」により、人殺しモーセは、世界で一番柔和な人となることができたのです。モーセの奉仕の底には、「無力」と、見る影もない枯れた骨、全く打ち砕かれた自己の生活がありました。このモーセに、「全能なる神」「よみがえりの神」「きよめの神」が満ち満ちて、モーセの奉仕の「すべて」となられたのです。

この学校に、主は私たちをも導いておられます。私たちの場合は、四十年一つところで学び、続く四十年をご奉仕するというのではないでしょう。訓練とご奉仕が並行してあります。

まことの奉仕は、主のために働くことではなく、全能なる、よみがえりの、またきよめの主が、「空の器」である私たちを通して外に現わし給うことです。私たちは、この「土の器」が、主からの宝を持つその度合いにしたがって、多くの人々を救いに導き、またキリストの満たしにまで至らせることができるのです。

一方では、主は私たちを空にし、虚しくし、また他方では、主は私たちを建て上げ、ご自身のみ姿に変えていかれるのです。

私たちも、モーセと同じように、アブラハム、イサク、ヤコブの神を自らのものとして、まことの神のしもべになりたいものです。

了